緋弾のアリア× 特務零中隊

spas12K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア×　特務零中隊

【Ｎコード】
Ｎ３４８０Ｚ

【作者名】
ｓｐａｓ１２Ｋ

【あらすじ】
警察直属ではあるがその存在を秘匿している組織。
それに所属している人間と武偵の人間とのお話です。
少しマニアックな銃が出てきたりもします。
オリキャラ重視の傾向が少しあります。

行くぜ野郎ども！！（前書き）

文句だけはご勘弁を！！
異常です。

以上です。

行くぜ野郎ども！！

「めんどい任務やでこれはぁぁ～」
高速で移動するヘリの中、伸びをしつつ間抜けな声を出す。
「そうですね～」
帰ってきたのは、これまた気が抜けた声。
「ルチアは相変わらず冷たいなぁ」
「そうですか～？」
いつもと変わらずのんびりな少女ルチアは自分の武器を点検していた。
ＺＢ２６チェコの傑作軽機関銃だ。
腰にはＶＺ６１スコーピオン短機関銃、ＣＺ７５拳銃。
「お前、ほんまにチェコの銃が好きだな」
「ええ～」
白長髪の髪を揺らして肯定するだけだった。
ってまあ、人のことは言えず自分の持っている銃も相当マニアックだ。
ｓｔｇｗ５１０というスイスの全主力突撃銃だ。
アサルトライフルという部類に入るが．３０８ウィンチェスターよりも強力な実包を使う。
腰にはＰ２１０これもスイス製だ。
加えるとどちらも滅茶苦茶高い。
「それと、任務中はコールサインで呼んでくださいですよ～」
「はいよ、ヴェスパ４さん」
「それで、よろしいのですよ～。健介さん」
「お前もコールサインで呼べや！」
思わず突っ込む。
「あい・さ～、なのですよ～」
適当な返事が返ってくる。

固い椅子にもたれて時計を見る。
「そろそろ時間やな」
「ですね～」
その折だった。
「ヴェスパ３、４降下用意」
ヘリの機長が告げる。
「了解や」「了解ですよ～」
その言葉を合図に、機体足部のハッチが開く。
そのまま飛び降りる。
続いてルチアも飛び降りる。
数十メートルの距離を慣性を受けて落ちながら目的の建物に着地する。
衝撃でコンクリが割れて屋上に大きなひびが入る。
「毎度すごい襲撃の仕方やな」
「ですね～」
屋上の扉を探して素手でぶち破る。
「さあ、やりまっか」
「了解だ～」
二人それぞれ別々に移動する。
目の前のドアを開けると、黒スーツ姿の厳つい男が数人いた。
「誰や。どこの奴や!?」
そう叫んだ男の体が穴だらけになる。
そのまま横なぎに７．５ｘ５５ｍｍ　のフルサイズカートリッジが吐き出される。
後ろの壁まで穴だらけにして男が全員倒れていた。
「相変わらず、この銃は強いなぁ。惚れ直すわ」
そう呟いて、どんどん突き進んでいく。
次々と弾倉を取り換えて、銃撃の手を緩めない。
敵がいると思えば壁の後ろにいようが問答無用で撃ち殺していく。
前に十階建ての建物の三階まで進んだところで奇妙な者を見つける。

「あちゃあ、やなもん見つけてもた」
健介が見つけたのは傷だらけの少女だった。
「お、まだ生きとるな」
傷だらけで周囲に血が飛び散っていたが、どれも死に至る傷ではない。
「本部か？　女の子を一人助けたんや、回収ヘリに医者乗せといて」
「こちら本部、了解」
短いやり取りで通信が切れる。
「ヴェスパ４よりヴェスパ３へ、タゲは潰したよです～」
「よーやった、ほな撤収しましょか」
「了解です～」
その折、銃声が聞こえる。
「ヴェスパ３か？」
「私じゃないですね～。武偵の子たちです～」
「チっ、はようズラかろか」
あんまし面白くない連中がい来たものだと悪態つきながら、屋上まで戻る。
ルチアは先に到着していて、ヘリの誘導をしていた。
その数分後に撤収は完了して空を飛んでいた。
少女を拾ったという変わったことがあったが、まあ上出来だ。

行くぜ野郎ども！！（後書き）

まったアリア関係なくてごめんなさい。
次回で登場です

高・校・編・入　命令！！

「はあ！　そんなん絶対嫌やで！！」
「命令だ」
「ホワイ！　何でそんな命令が回ってくんねん！？」
「機密だ」
髭を生やしたの中年男が機械的に言った。
「それにヴェスパ３、ホワイではなくフォワァイだ」
「んなもん、訂正せんでええわ！」
「いや、重要だ」
男はあくまで毅然として言い張る。
「だ・か・ら！　なんで俺が高校しかも＜武偵高＞へ編入するんだ」
机をバンバン叩きながら講義する。
「がんばれ。ヴェスパ４とヴェスパ７も一緒だ」
説明しておくとヴェスパ１～６はこの中隊での俺たち一人一人のサインだ。
ん？　７？
「ストオオオッップ！　ヴェスパ７って誰や！　いつ増えてん！！？」
「昨日だ。そして昨日君が拾ってきた少女だ」
「ああ、あの子か？　それなら納得する……わけあるか！」
「うるさいなお前は、命令出す遂行しろ」
「うえぇぇい」
全身全霊で願い下げたいが――
目の前、天田中尉からの命令は絶対だ、従わなければならない。
「わかりやしたよ」
「素直でよい。そしてヴェスパ７だが君と同じ１６歳。武器はロシア系だ」
「スペックと経歴は？」

「機密だ」
「？」
初めてのことだ、いままでヴェスパは大抵の経歴とスペックは教えてくれた。
だが、今回は情報無しときた。
「まいっか。ヴェスパ着任は理由と信頼込やからな」
「そういうことだ」
そうこうしていると、入り口の自動ドアが開く。
そこに亜麻色の小柄な少女が立っていた。
「ライカ・スクリャロフ女史だ」
「よろしくお願いしま――――へふっ」
入って来ようとして盛大にこける。
「見ての通りドジだが。うまくやってくれ以上」
話も終わったので、ライカと呼ばれる少女を連れて尉官室を出る。
その後いろいろ身支度をした後、専用の車で遠くの東京を目指す。
さらば大阪――――
車内から小さく敬礼する。
と言うのもこの専用車窓は特殊ガラスで光が通らない、よって外は見えない。
車内も運転席とは隔離されていて、座り方も向かい合う形だ。
これは、車内でも会議を行うためだ。
今は三人の人間が中央のテーブルに銃を広げている。
俺はｓｔｇｗ５５０、５１０突撃銃とＰ２１０拳銃そしてスペクトラ短機関銃。
ルチアはＺＢ２６チェコ軽機関銃、ＶＺ６１スコーピオン短機関銃、ＣＺ７５拳銃。
さらにはＺＶＩ対物銃まで用意している。
ライカはＡＫ７４突撃銃、ＰＰ－２０００　短機関銃、ＳＶＤＳ狙撃銃、スチェッキン自動拳銃。
Ｖ－９４対物狙撃銃まで用意している。

ここまで、よく装備が整えられたと感心しつつ、この先のことに頭を抱えるのだった。

高・校・編・入　命令！！（後書き）

すいません、まだ何故か武偵が出ていません！！
しばらくお待ちを

武偵の実力を……

大阪～東京間揺られること八時間。
新たな問題が、というか昨日からそうなのだが……
「えっと、金を貰えれば何でもする、極力人を殺すな、その他ぁ何だ？」
「いろいろあるみたいですよ」
中尉から渡された数枚の書類にライカは目を通す。
「むにむに～、何でもいいですの～」
座席に横になって寝ていたルチアが投げやりに言う。
「お前は起きろ」
「康介さん私はもうそろそろ、飽きてきたです～」
「お前、やっと俺の名前を正確に言うたな」
「あれ？　私前回間違えましたか～」
「ああ、『健介』って呼んだ」
「同じですよ～、健介も康介も～」
鼻から直すつもりはないらしい。
あっそう、と言って再び書類を読んでいく。
「うりゅ？　コウさんは高校が面倒なんですか？」
「面倒ってか武偵校っていうのがなぁ」
康介が面倒くさがるのにも理由はある。
武偵というのは金さえ積まれれば何でもするという点。
成人にも満たない男女が武装している点。
紛いなりにも高い戦闘力や特殊能力を有している点。
そのほか幾つかの点からさまざまな組織・軍から目を付けられている。
例えば、シールズ、ＧＩＧＮ、空挺スペツナズ……
かくいう自分達、零中隊も警戒している。
だからこそ康介たち三人を編入させたのだ。

任務は情報収集そして行動の妨害。
楽な任務ではなくすぐに終わるものでもない。
小耳にした話では、最悪の場合は武力制圧の実行もあり得るとか。
まあ、他の国の特殊部隊に攻め込まれるよりは幾分ましだろう。
はぁ～と深い溜め息をついて書類を机に頬る。
「うりゃ～、大変そうですね」
「だなぁ～」
笑っているが、こいつ等の御守りも頭が痛い。
何せ天然ゴーイングマイウェイの二人だ。
「どないしたもんかな～」
「何が大変なんです～」
またムクリと起き上ったルチアが呟く。
自分たち以外のヴェスパ達が言っても良いはずなのだか。
「普通の高校ではないが年相応の学生青春を送ってこい」
という中尉の言葉でこの三人に決まった。
カバンから板チョコを取り出してかじる。
そんな折、車が止まって扉が開く。
どうやら目的地に着いたようだった。
朝の眩い日差しの向こうに島が見える。
あそこに問題の武偵あるのだ。

新学期に合わせて編入したので三人全員が二年だ。
学部は都合上、強襲学部になっている。
各々が持つ銃器を詰めたバックパックや車輪付きのアタッシュケースを転がす。
校門が見えてきたところで、無線機に通信が入る。
「こちらヴェスパ3、通信確認。オーバー」
「こちら本部。
現在地点の近くに自転車に乗った学生もしくは武装された車両が見えるか？」

「否定。確認できません」
「ヴェスパ３に指令。近くの建物の屋上より周囲を詮索し報告せよ」
「了解」
「ヴェスパ４、７は予定通り学校へ登校させよ」
「了解」
通信が切れる。
二人の方に向きなおって通信内容を説明した。
「じゃあ私たちはそのまま登校します～」
「うりゅ～、頑張ってくださいコウさん」
「ライフルは持ってといてな」
「りゃじゃ！　です」
ピシッと敬礼してライカが荷物を運んでいく。
手伝う気が皆無のルチアは先に進んでいた。
「さてと……」
手近なマンションを見つけてその屋上まで移動する。
慣れた背中の縦長の黒いケースから一つの狙撃銃を取り出した。
ＳＳＧ―３０００、御多分に漏れずこれもスイスの銃器会社に関係のある銃だ。
それを片手に双眼鏡で長方形の島を見渡す。
「あれやな？」
問題の人物はすぐに見つかった。
自分と同じ武偵校の制服姿の少年が猛烈な勢いで自転車を漕いでいる。
その後ろをセグウェイと呼ばれる乗り物が追いかけていた。
「ヴェスパ１から本部へ、対象を発見。指示を」
「可能なら救助せよ」
「了解。ですが何故ですか？」
「いくら武偵の生徒でも人であることに変わりはない。
それに武偵全員が悪とは限らない。見殺しにすることはない」

「承知」
通信を切って狙撃銃を構える。
光学照準器を通して、その光景は鮮明に確認できた。
「あのセグウェイ、ＵＺＩくっ付けとるんか」
なまじ速い動きゆえに捉えることが難しい。
距離と風と対象の移動先を考えて見越し射撃を行う。
弾丸は移動するセグウェイの少し前の地面を抉った。
「ちょい後ろか……」
そう思ったとき、信じられない光景が飛び込んでくる。
建物の屋上から少女が落ちてきたのだ。
低抵高度のパラシュート展開。
さらに体を一回転させて手と足の位置が入れ替わる。
太ももの銃を取り出して発砲。
見事にセグウェイを破壊して少年を自転車から引きはがす。
直後に自転車は爆発した、少年が必死で逃げていた意味も分かる。
「二人は？」
二人の後を探すと爆発地点から近くの倉庫。
武偵校の運動場近くの建物に吹き飛ばされた痕跡がうかがえた。
「あれなら、助かったやろか？」
そう思った時、自転車の残骸の近くで数台のセグウェイが止まっているのを見つける。
「しめた、止まっとる今なら」
状況を確認しているのか命令待ちなのか、止まっている目標に照準を合わせる。
引き金が落ち、弾が発射さ、目標が飛び散る。
遊底を前後させ次の目標を破壊する。
五発目を打ち終えて弾薬を再装填した。
もう一度覗き込むと、目標は消えていて、二人が吹き飛ばされた倉庫を囲んでいた。
「遠いな」

余り慣れていない狙撃であの距離は難しい。
そう考えたとき例の少年が入口から姿を現した。
躊躇無くＵＺＩが火を噴いた――――
そう見えた瞬間に全てのセグウェイが破壊されていた。
「何もんやねん」
言いつつ無線で本部へ通信を入れる。
「状況を知らせよヴェスパ３」
「少年は無事やし、敵も全て消滅したわ」
「なら良い。学校へ行け」
「了解、交信終了」
電源を落としてから薬莢を回収する。
時計を見ると始業式は既に終わっている時間だった。
「あちゃあ、初日から遅刻や」
幸先が悪いにもほどがあった。
この先のことを考えると本当に頭が痛くなる頃だった。

Let Shoot It !?

「うりゅぅ、大丈夫でしたか？」
「大丈夫と言っちゃ大丈夫だったんだが」
自分たちが不思議な目で見られているのに薄々感じる。
それもそうだ、編入して来たのだから自分たちの顔を知る者はいない。
学期始めだけれども二年だから自己紹介もない。
「まあ、暇にはならんと思うけどな、ライカ？」
「うりゅう、そうですね」
ちなみに後ろの席のルチアは机に突っ伏してもう寝ている。
俺の荷物は女子寮の彼女達の部屋に置いてあるらしい。
時間に余裕がなかったので直接来てしまった。
背中に背負ってる縦長のケースも目立ってしまっている。
ふと、隣の生徒も机に突っ伏しているのに気が付く。
寝ている、というよりも落ち込んでいる。
ずももも、と黒いオーラが彼を覆っていた。
（話しかけ辛いな、おい）
右隣はライカだ。
「君は狙撃科の人？」
顔立ちの整った雰囲気の良い男が話しかけてくる。
「いやちゃうで、強襲科や」
「へえ、そうなんだ。
あ、僕は不知火（いらぬい）　亮（りょう）。君は？」
一瞬、関西弁に驚いたようだが特に気にしている様子はない。
「俺は豊和（とよわ）　康介（こうすけ）や。よろしくな」
「こちらこそ、よろしく」
何気ない挨拶をしていると、活発そうな奴が付か付いてきた。
「俺は武藤（むとう）　剛気（ごうき）な。よろしく！」

「お、おう。よろしくな」
武藤という男は横に突っ伏している男を指さす。
「そして、あいつが遠山　キンジ（とおやま　キンジ）だ。女嫌いで根暗だがまあよろしく、してやってくれ」
「はあ」
「んで」
そういって武藤が近づいてくる。
「お前の左の可愛い子、名前なんて言うの？」
コイツ、本当はそっちが目的か？
「うりゅ？　私？」
ライカが自分を指さして首をかしげる。
「そうそう、名前なんて言うの？」
「ライカです。よろしくです」
「そうか、ライカちゃんかよろしく」
武藤はどことなく嬉しそうだ。
もう一話題しようとしたとき、担任が入ってきて皆席に戻る。
右と左はまだ机に突っ伏している。
「みなさん、席についてください。
今日は転校生が来ました、って三人はもう座ってますか」
康介とライカ、ルチアの方を見て担任が確認する。
全員こちらを見て、ああなるほど、納得する。
「そしてもう一人の転校生を紹介しまーす。
神崎・H・アリアさんです」
ガララと扉を開けて桃色のツインテール少女が入ってくる。
（あれは、さっきの女のか）
先ほどのことが思い出される。
「あたし、あいつの隣がいい！！」
入って来るなり、ビシッと指をさして自分の席を要求する。
その指の先には、その声に驚いて飛び起きた男。
遠山が目を丸くしていた。

「ほいじゃ、先生おれが変わります！」
と遠山の横の席、康介と反対側の武藤が手を挙げる。
そそくさと武藤は席を移動し、そこに神崎が歩いてくる。
「これ、返すわ」
そう言って、遠山の机にドンッとベルトを置いた。
（ワオ、新学期早々お熱いな）
その光景に邪な想像をしてしまった。
「理子わかった！　これフラグバッキバキに立ってるよ！！」
「はあ？」
わけのわからない顔をする遠山。
「キー君ベルトしてない、そしてツインテールさんがそれを持ってきた。
その謎はつまり！」
「「「つまり！？」」」
全員が興味津々に聞く。
「キー君が彼女の前でベルトを脱ぐ何かをした！！」
「なるほど、つまりは恋愛中と」
不知火が納得したように呟く。
「なにいい！！」「影の薄い奴だと思ってたのに」「女嫌いじゃなかったのか！」「不潔……」
クラス中が騒ぎ立てる。
もう暴走状態だ、てか先生傍観してるし。
その騒ぎを断ち切る、鋭い銃声が幾度となく聞こえた。
「れ、恋愛なんてくだらない！　全員覚えておきなさい！！
そういう馬鹿なことという奴は、風穴開けるわよ！！！」
開いた口がふさがらない。
（えらい、ビーバップなとこに来てもうたな）
と心から思うのだった。

夕方、ライカとルチアの部屋から愛銃をとって男子寮に来ていた。

「俺の部屋は～、ここか」
ようやく自分の部屋を見つける。
中隊に居た頃のように一人部屋でないことを残念だと思う。
誰かと相部屋らしい、カードキーを通して中に入る。
「邪魔すんで」
そう告げて玄関化で靴を脱ぐ。
「どうぞ」
と、気怠そうな聞いたことのある声が返ってくる。
「ああ、遠山が相部屋なんか」
「よろしく」
愛想がねえな、と内心思うが気にしない。
特別人が悪そうでもないので、あまりあれこれ言わないことにする。
事前に教えられた部屋の間取りと一緒だった。
とりあえず物置に荷物を入れて、クローゼットに服を入れていく。
個別に四つ縦に並んでいる。
「たくさん銃を持っているんだな？」
暫くこちらを見ていた遠山は話しかけてきた。
「ん、まあ俺の愛銃やな」
「強襲科でも普通拳銃なのに、すごいな」
「そうかぁ。まあ半分趣味みたいなもんやけどな。
ちなみに拳銃はこれや」
そういって脇腹のホルスターからＰ２１０を抜いて見せる。
「俺はこれだ」
そいって、銀色に塗装された銃を見せてくれる。
ベレッタのＭ９だった。
「悪くない銃やな」
「そっちこそ、とても高い銃じゃないか」
「せやな」
思ったほど無愛想でもないみたいだ、冷静な人物という印象を受

ける。
「っと、銃の整備してええか？　ちょっと今日使った奴があってな」
「構わないが……装備科に頼めばいいんじゃないか？」
銃を取り出しつつ呟く。
「自分の命を預ける相棒や、人に触らせるくらいなら死んだ方がええ」
一瞬、遠山は驚いた顔をした。
「まあ、人それぞれだよな」
「せやで」
そう答えて、今日使ったＳＳＧ－３０００を取り出す。
解体はしないで、銃身内部をブラシ付きの棒で擦り、遊底の可動部に油を差し込む。
光学照準器のレンズを特殊な布で磨き、銃全体を拭いていく。
簡易メンテが終わった時にベルが鳴る。
「俺が出る」
そういって、遠山が玄関へ向かっていった。
扉を開くと同時に
「遅い！　すぐ出なさいよ！！」
甲高い例のあの少女の声が聞こえてきた。
例の子、神崎はズカズカと部屋の中まで入って来るとテーブルを占拠した。
一瞬康介の狙撃銃を見てさらに上機嫌になった。
そしてこう高らかに宣言した。
「キンジ、あんた私の奴隷になりなさい！！」
「ＳＭプレイか？」
スコーンと胡椒瓶がが飛んできて頭に直撃する。
「何すんねん！？」
「あああ、あんたこそ何言ってんのよ！！　次は風穴開けるわよ」
「思うたこと言うただけやのに……」

聞こえないよう小声でぼやく。
「神崎、どういうことだ説明してくれ」
困り顔の遠山が説明を要求した。
「そこのアンタ、その狙撃銃の口径は・３０８ウィンチェスターやけど。
それがどないしたん？」
何故か神埼は笑みを浮かべている。
「あんた朝のチャリジャックを見てたでしょ？」
あのセグウェイ付近に落ちていた弾丸を調べられたか……
時間が無かったので薬莢だけを回収した自身に悪態をつく。
「さあ、しらんな」
あくまで、白を切ることにする。
「バレバレね。まあいいわ、あんたもついでに奴隷になりなさい」
「まてまて、ついではないやろ」
「数は多くて困ることはないわ」
「俺の扱い雑いな、おい」
「ふう、それより客人に何か出しなさいよ」
会話が成り立たねえ。
「無視して話を進めるな！」
少し怒っているのか、遠山が声を荒げる。
「なんで、俺が奴隷なんだ」
「あたしには必要なのよ！　強襲科に移って私の組むパーティに入りなさい」
「強襲科が嫌で転科したんだ。そもそも俺は武偵をやめるつもりだぞ。」
「私には嫌いな言葉がある『無理』『疲れた』『めんどくさい』
この三つは人間の持つ可能性を押しとどめる良くない言葉。
それに長期戦も予想済み。うん、て言わないなら……」
「「それに？」」
「泊まっていく！」

「「はあ！？」」
「そして、出てけ！！」
机を叩いて立ち上がる。
「「Ｗｈｙ！！」」
「分からず屋はお仕置きよ！　そとで頭冷やして来なさい！！」
強制的に殴りだされ、何が楽しいかは知らないが男二人コンビニで時間をつぶす羽目になった。
大阪に帰りてえ！

神崎に追い出された後、遠山と二人でコンビニで立ち読みをしていた。

「今日は厄日だ……」

「ほんま、そうやな」

げんなりして呟く遠山に、心の底から同意する。

「朝からひどいスタートだったぞ」

「まあ、遠くから見てたんやけどな」

「そうらしいな。助けてくれたのか？」

神妙な顔で遠山が訪ねる。

「二、三台あの車両を壊しただけや。

あの子……神崎がお前を助けんかったら、まあ死んでたやろな」

「そうか。でもありがとう」

「それは、あの子に言ってやり」

「……」

何故か黙り込んでしまう遠山、まだ何か言いたそうだ。

それにしても、直接彼女に感謝を述べれない理由でもあるのだろうか？

「それで、見たのか？」

「？　ああ……」

見た、というのは、あれの事だろう。

俺は遠くから照準器越しに神崎の姿を捉えた。

同じく、遠山も振り返った時に神崎の姿を捉えた。

そして、神崎はパラシュートを操りながら、体の上下を入れ替えた。

当然その流れを見ていたわけで……

「ああ、見たんやけど。あれは、不可抗力やろ？」

「だが、あの状態の俺は……」

「言わんでええ。確かにいまどき純白の下着は珍しい。せやけど見てもうた物は仕方ない。彼女には諦めてもらお」
「実は……って下着？　何の話をしている？」
「いや、お前も見たんやろ？　そら空中で半回転したら見えてまうしな」
そう、彼女が体を半回転させたとき見てしまったのだ。
普段は周りを覆う布に隠れて見えない神域を。
高倍率の光学照準器越しに――――
「豊和？　一体何の話だ？」
「神崎の下着の話やけど、お前も見たやろ？」
「……いや、その話では無いんだが」
「じゃあ何の話や？」
聞き返すと遠山は言うか言わないか悩んでいる顔をした。
そして、何かを決心したように口を開く。
「その後の、倉庫から出たときの俺を見たか？」
「まあ見たっちゃ見たけど、人間離れした技やったな」
正直とても疑問に思っている。
人間離れしたその動きわまるで別人のようなものだった。
「そう、そのことだ。できれば人に言わないで欲しい」
不思議に思った、武偵な自分の手柄を宣伝した方が仕事もランクも上がるはず。
それをわざわざ秘密にしたいとは、何か理由があるのだろうか？
だが、遠山の顔は真剣そのもの、あまり野暮な質問はしないことにしておく。
「別に他人の秘密を話す性分は持ってへん」
「なら助かる」
「ま、そんな事はええんやけど……」
「ああ……」
言葉の先を察したのか遠山も同じように溜め息をつく。
「あとちょいしたらアイツも帰るよな？」

半分希望を込めて呟く。
「だと思うが」
心細げに遠山も答えた。
立ち読みしていた雑誌を変えようとした時、携帯の呼び出し音が鳴った。
「もしもし、豊和ですけど？」
『どーぶるい・びえちーる、コウさん。今、お暇ですか？』
ライカの声だった、どーぶる……何だって？
『あ、英介～？　ルチアだよ～ちょっと部屋まで来てくれない？』
「名前くらいキチンと憶えて欲しんだが？」
『あと、ライカの言葉の意味は＜こんばんわ＞です～。ちょっとロシア語が混じってるみたいだけど気にしないで～』
「普通気になるが……」
「んじゃ～」
ブツッ、ツーツー。ほぼ一方的に電話は切られた。
遠山に振り返って言う。
「ちょっと、用事ができたわ」
「ああ、分かった」
遠山の返事を聞いて、コンビニを後にした。

相棒　～コーリシ～（後書き）

呼んでいただきありがとうございます。
できるだけ原作を忠実にしようと思います。
質問があればお書きください。

感想待ってます！！

「準備はいいんやな？」

「いいよ～」「ぱじゃーるすた（どうぞ）」

女子寮の一室、カーテンは閉められ電気の明かりが部屋を照らす。
風呂上りなのか二人の髪が少し湿っていて、体も火照っていた。
バスローブ姿の二人はソファに座っている。

「後から文句は受け付けへんで？」

その言葉にルチアがふっと笑いを浮かべる。
同意したとみなしてライカを見る。
こちらもコクコクと頷いている。

「じゃあ……行くぞ」

手のひらを握り締めて拳を作る。
一瞬の沈黙。
それを破るように三人が声を合わせる。

「「「じゃんけんポン！！！」」」

三人の腕が付きだされる。
長い長い沈黙。

「うっわ、負けてもた！！」

「私も負けてしましました」

康介とライカはパー、対してルチアはチョキ。

「にゅっふっふ、ではではアディオスです～」

うれしそうに荷物をまとめて行くルチア。

「畜生！　俺が一番帰りたかったんやけどな！」

「後から文句は受け付けない、って言ったの恭介のくせに～」

勝ち誇った顔でルチアがガッツポーズをとる。

なぜこのような状況になっているのかというと。

先ほど、中尉から伝達が来た。

その内容は、三人のうち一人は帰って良いということだ。

中尉とその秘書の少尉が検討したところ二人でよい。

そういう結論に達したらしい。

そして、その一人を決めるジャンケンが今しがた行われたのだ。

「そういう言うわけで恭介は部屋に戻ってね～」

「へいへい」

用事も終わったので部屋を後にする。

あまり女子寮に長いもしたくないし、そろそろ頃合いだと考えたからだ。

「ばいばーい」「だすびだーにや（さようなら）」

二人とも手を振って見送ってくれた。

男子寮入り口にて、偶然にも遠山と合流した。

「何かあったのか？」
「や、なんもあらへんかった」

短い言葉を交わした後、部屋に戻る。
扉を開けて中に入る。
部屋の中は真っ暗だった。

「いない、帰ったのか」
「せやろな」

靴を脱い廊下を進む。
ふとバスルームから鼻歌が聞こえてきた。
嘘だろ！？
そう思って少しだけカーテンを開ける。
そこにはカゴに入れられた制服と二つの日本刀が置かれていた。

「遠山、あいつ風呂に入っとるで……」

絶望した目を遠山に向ける。

「ありえんだろ」

呆けたように呟く遠山、そこに不吉な呼び出し鈴が鳴る。
目配せをして遠山に見にいくよう指示する。
無言で頷き、扉まで忍び行く遠山。
すっと小さな穴から外を見る。
外に何者が居るのか確認した遠山がこちらを見る。

（居留守を使おう）
（了解）

目の合図だけでやり取りする。
戻って来ようとした遠山が段差に躓く。

「キンちゃんどうしたの!?　怪我してない?」

扉の向こうから、済んだ綺麗な声が聞こえてくる。
諦めて扉を開ける遠山。

「な、なんだよお前その格好は」

不安そうにバスルームを見ながら言うキンジ。

「あっ・・・これ、私授業で遅くなっちゃって・・・キンちゃんに御夕飯作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど・・・い、嫌なら着替えてくるよっ」

恥らいながら説明する少女。

「いや、別にいいから」
「ねえ、キンちゃん、朝出てた自転車爆破事件の周知メールってキンちゃんのこと?」
「あ、ああ俺だよ」

遠山が肯定すると、奇妙な悲鳴を上げて少女は飛び上がる。

「だ、大丈夫?　怪我とかなかった?　手当てさせて」

手当という口実のもとに少女は遠山に手を伸ばす。

「俺は大丈夫だから触んな」

少女は少し残念そうにしたがやがって拳を握りしめて宣言する。

「でもよかったぁ無事で。
それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて！　私絶対犯人を八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ」

さらりと怖いことを言う。
というか背後から何かすごいオーラを出している。

「それより用事はなんだよ？」
「あ、あのこれね竹の子ごはん作ったの、今旬だし。
それに私明日から今度は恐山に合宿でキンちゃんの御飯作ってあげられないから」
「お、おお、ありがと。よし、用事は済んださあ、帰ろうな」

用も済んで帰ってくれると思ったが、少女はなぜか一人で語りだした。

「い、一日に2食も作っちゃうなんて……
な、なんか私お嫁さんみたいだね……って何言ってるんだろ私。
あは、あはは変だね。変？　編！？
うん。キンちゃんどう思う？」

猛烈な勢いで凄い事を話し出す少女に遠山も押されている。

「わ、分かったからお引き取りください白雪さん」

何とか帰ってもらおうと必死な遠山。

今わかったが少女の名前は白雪というらしい。

「分かったって・・・それはつまりキンちゃんお嫁・・・」

その時風呂場で水の落ちる音がした。

「？　中に誰かいるの？」

「中に誰もいませんよ」

と、その時少女と目が合う。

「キンちゃんその人だれ？」

「コイツは俺のルームメイトだよ。豊和　康介って人だ」

「そうなんだ」

目ざとく玄関の靴を調べる白雪。運よく神崎の靴は死角にあった。

「他には誰もいないの？」

「「誰もいない！」」

遠山と同時に声が出た。

「そう、よかった」

遠山がゆっくりと扉を閉める。

白雪が遠ざかっていく足音が聞こえる。

心臓に悪い時間だった気がする。

遠山も安堵の表情を浮かべたが、すぐに気を引き締める。

そう、まだ問題は残っているのだ。

素早くバスルームに移動する二人。

音もなくカーテンを開けて刀に手を伸ばす。
その折、神崎がバスルームから姿を現した。

「へ、へ、変態！」
「ちがう俺はこれを！」「ちゃう俺はコイツを！」

そう叫んで遠山が刀を持ち上げる、その先にはトランプ柄のブラが。
遅れて持ち上げた康介の刀の先には同じ柄のパンツがぶら下がっている。

「し、し、しっ」

わなわなと震えだす神崎。

「死ねえええええ！！！」

その後、気を失うまで殴られた二人は朝まで目を覚まさなかった。

実力　そして　本名

「痛たた」

そこかしこが痛む体を摩って起き上がる。
目を覚ましたのは冷たいフローリングの上だった。
隣で遠山も寝ていた。
いや、気絶していた。
少しばかり腹も減っている。
あたりを見渡すと、昨晩に白雪が持ってきた竹の子弁当が見つかる。

「他人の物はあかんよな」

諦めて適当な物で朝食を済ます。
昨日出しっぱなしだった狙撃銃をケースに入れて物置に片づける。
代わりに少し小さな黒いケースを取り出す。
中から出てきたのはシテス社製短機関銃＜Ｓｐｅｃｔｒｅ（スペクトラ）＞。
ミニ・ウージー程度の全長だが装弾数５０発を誇る複複列弾倉を有する。
クローズドボルトで作動し、ハンマーをデコックして初弾をダブルアクションで発射可能だ。
イタリア製の銃だが少数がスイス軍で使われていたりする。
命中精度もよく旧式設計だが、現代の短機関銃にも引けを取らない。
その銃を背中の上着とカッターシャツの間に装備する。
拳銃は左脇の下、自分が一番取り出しやすいところにある。
時刻は午前五時。
登校にはまだちょっと早い。

遠山を踏まないよう注意しながら進み、靴をはいて武偵校へ向かう。
向かうのは教務部――――武偵校の三大危険地域と称されている。

（元人殺しも居るとか言う噂やけど……）

もともと康介は警察機関の人間だ、武偵の姿は仮の物だ。
ゆえに人殺し等の罪人は見逃すことはできない。
武偵校へ編入したのは、そういった内部の情報を詮索するためだ。

「失礼します。2年A組の豊和ですが、担任は居られますか？」

扉を開けて中を見渡す、朝早い時間だが大勢の人間が中に居た。
ざっと、見渡していくが……

「はい、私が担任ですが」
「あ、先生。二、三質問があるんですが？」
「ええ、構いませんよ」
「ありがとうございます。聞きたかったのですが……」

あれこれと武偵について質問してる間に部屋の人間の顔を見ていく。
全員を見渡したところで折よく先生の回答も終わる。

「ありがとうございました」
「いえ、これから頑張ってくださいね」
「はい」

強襲科を後にして人気のないところまで歩く。
特にといった収穫は無かった。

噂とは尾ひれが付きやすいものである。
人殺し、というのは多分だが民間軍事会社の元隊員の事だろう。
日常で人を殺せば犯罪だが、戦争では逆に功績となる。
民間軍事会社は現在で言う傭兵部隊だ、おそらく彼らの事を『殺し屋』と言う噂が流れたのだろう。
人を殺している事に変わりはないのだが……
法律上の罪は無いので捕まえることはできない。

「装備科は昨日見たし、どっかでのんびりしよかな」

肩透かしを食らったような気がしつつも強襲科のある施設に向かう。

現在の時間は六時二十分。
やや小型の耐久性に優れたノートパソコンを開けて起動させる。
すぐに照明が付き暗証番号を入力する。
番号が認証されトップ画面が立ち上がる。
いくつかあるショートカットの中からプログラムを開ける。
この時間に本部から指令や報告書が届く。
暗号化されたデータが二つダウンロードされる。
別のプログラムを立ち上げて暗号を解読する。
特別な書式に変換されたデータを専用のツールで文章にする。
手間が掛かるが、機密を守るためなので仕方がない。
一つ目の文書はこういう内容だった。
「初日の報告書は目を通した。以後も定時連絡を欠かさぬよう。
以上、健闘を祈る。
追伸。極力怪しまれないため、武偵としての行動はするように」
昨日自分が出した報告書への中尉からの返事だった。
もう一つは自分が資料を要求したものだった。
「電子戦処理班より

氏名　神崎・Ｈｏｌｍｅｓ・アリア　４世（かんざき・ほーむず・ありあ）
生年月日　＊＊＊＊年９月２３日
身長１４３　体重？？
補足情報
父親がイギリス人とのハーフ。自身はクオーター
ロンドン武偵局所属。尚現在は休職中
ランクは『Ｓ』
使用武器　Ｍ１９１１Ａ１　スチールモデル／ステンレスモデル
各一丁
　　小太刀　二本
二つ名――――――」

そのほか大量の情報が記載されていた。
その中でも一番目を引いたのは……

（ほーむず？　四世？）

噂では聞いたことがあったが、まさか彼女の事だとは思っていなかった。
必要な情報を読んだ後、二つの文章データを完全消去する。

「なんや、えらいのに目え付けられてもたなぁ」

道の小石を蹴飛ばして悪態を呟く。
小石の飛んで行った方向を見ると暇つぶしに丁度良い設備が見つかった。
屋外の射撃訓練場。

「標的を出す手目には……あれ、どないすんねやたっけ？」

機械を弄りながら悪戦苦闘する。
目標物を出現させるための装置があるはずなのだが……
さっぱり使い方がわからない。

「まあ、ええか」

呟いてポケットからコインを取りだす。
朝日を受けて銀色に輝くそれを親指で弾く。
高く空に打ち出された貨幣は大きな弧を描いていく。

「たとえ殺人者でも命は大事？　それが、人権？」

ホルスターから愛銃を抜き去り、撃鉄を起こす。

「せやけど、そいつ等は他人の人権犯してんねんで――――」

一人呟き、引き金を落とす。
乾いた銃声。
放物線を描いていたコインに穴が開く。
そこで、誰かがこちらを見ているのに気が付く。

「誰や？」

振り返ると大きく黄色いヘッドフォンを耳に当てている少女が立っている。
背中には大きな狙撃銃、ＳＶＤドラグノフを背負っていた。
ライカの持っているＳＶＤＳの原型となったモデルだ。

「狙撃科のレキです」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声でレキという名の少女は言った。

「俺は強襲科の豊和やよろしく」

「……」

返事はなく、少し頷いて答えとする。

正直、掴み所がない人物だ。

二つ隣の射撃スペースに移動したレキは自然な流れで背中の獲物を取り出す。

手元の機械を操作すると遠くの方に標的が出現する。

目算距離にして約五百。

市街地戦での中距離狙撃の距離と同じくらいの遠さだ。

「……」

何も言わず安全装置を押し下げ、初弾を装填。

そして、発砲。

燃焼された火薬のガス圧を利用して次弾が装填される。

遊底の動きに合わせて引金が引かれていく。

弾倉が空になると取り替えてまた撃ちはじめる。

話しかけても無駄そうなので射撃場を後にする。

遠山と神崎が一緒に登校してきたのが見える。

ちなみにライカは寝坊して遅刻してきた。

五限目になり各科の授業に代わる。

「遠山どないすんの？」

「俺はクエストを受ける。

アリアはアサルトの実習中のはずだから、晴れて解放されるはずだ」

「俺もついてってええか？」

「別に良いが、何故だ？」

「俺もあいつとは関わりとうない……」

遠山の了承を得て二人で民間からの依頼をこなす事にした。

選んだのは、迷子の猫の捜索。比較的簡単そうなものだった。

（ホンマに何でもすんねんな）

遠山が探偵科で依頼を受け、さあ外へ出ようとした時だった。

「キンジ、コウ」

待ち伏せしていたアリアが出てきて、二人とも膝から崩れ落ちる

「何で……ここに居るんだよ」

「あんた達が居るからに決まってるでしょ」

「答えになってへん。それに授業はどないしてん？」

「あたしはもう、卒業できるだけの単位を揃えてるもんね！」

あっかんべ、と少し舌を出すアリア。

その仕草に少し可愛いと思ってしまたのに違いは無い。

だが、しかし！

いつ何時、二丁の銃をぶっ放して、日本の刀を振り回すかもしれない人物だ。

あと少しお淑やかなら、そう昨日の白雪ほど……

いや、あれはあれでヤバいかも知れない。

「それで、あんた達はどんな依頼を受けたのよ？」
「E、Bランクの武偵にお似合いの奴だよ。帰れっ」

遠山が面倒そうに手を振る。
その、遠山の言葉を聞いたアリアが不思議そうな顔をする。

「あんた、今Eランクなの？　そうしてコウはBランク？」
「そうだ、期末試験を受けなかったからな。
どのみち俺にとって武偵ランクは関係ない」
「ちなみに俺はBで普通やと思うやけど」
「まあ、いいわ。ところで受けた依頼は何なの？」
「「お前なんかに教える義務はない」」

二人そろって言うと、神崎が二つの銃を太ももから取り出す。

「風穴開けられたいの？」

あまりにも言うことを聞かない神崎に、康介も堪忍袋の緒が切れる。

「額でタバコ吸うコツ、教えたろうか？」

目を吊り上げながら、神崎に拳銃の照準を合わせる。
一瞬にして修羅場と化す。

「Bランクであたしに勝つ気？」
「やってみるか？」

じりじりと間合いと機会を見計らう。

「ストップ、ストップ！　アリアも豊和も、落ち着けって。
アリア、今日の依頼は猫探しだ」
「ふ～ん」

遠山が観念したかのようにバラしてしまった。
だが、簡単な依頼だ神崎も引き下がるだろう。
銃をホルスターに戻して、遠山と共に逃げるように歩き出す。
それを追うように神崎もついてくる。

「なんで、ついてくんねん？」
「あんた達の武偵活動を見せなさい」
「断る、ついてくんな。遠山も何か言ってくれや」
「奴隷のくせに口答えしない！」
「だから何で、奴隷なんだよ？　俺も豊和も奴隷になった覚えはないぞ」
「あんた、私にあんな破廉恥な事していて、責任取らないつもり!?
それに、昨日は下着まで取ろうとした！」
「あれは、不可抗力だろ」

いや、不可抗力でないのは確かだろう。
あの状況では怒られて仕方ないと思う。
武器を取り上げるのではなく、逃げることを選択すべきだったと後悔している。

「とにかく、私には時間が無いの。
あんた達の行動を見て実力を測らせてもらうわ」

その後、どれだけ文句を言っても聞き入れられず、結局神崎が付いてくることになった。

実力　そして　本名（後書き）

いろいろ変なお所があると思いますが、目を瞑っていただけると幸いです。

居場所は火薬と硝煙の匂いの中に

夕闇に染まる街並み。
誰の目にも届かない世界、誰もが目を背ける世界。
そこに、自分たちは居た。

「こ、殺さないでくれ！　頼む命だけは」

両手を上げて地を這いずり回る男。
その頭に亡霊（ゲシュペンスト）の銃口が向けられる。
無慈悲に貫通していく弾丸。

「あんたに殺された人も、そう思っただろうな」

屍に向けられたその言葉は、男の過去を語るものだった。

「こちらヴェスパ3、目標を制圧。次の指示を」

抑揚も感情も無い声が無線機に向けられる。

「本部より3へ、撤収しろ」
「了解」

短機関銃の弾倉を交換する。
廊下に落ちた空弾倉が任務終了の音を鳴らした。
血に染まった床を踏んで外に出る。

遠くに見える夜景と、今ここにある現状は本当に同じ世界にあるものだろうか？

そんな事を考えても変わらないことは知っている。
けれど、考えずにはいられないのだ。

人として生きない人間。
それが蜂（ヴェスパ）と称される自分達の道。
建物を出て合流地点に歩いていく。
防波堤の上から見えたのは、紅く美しい夕陽。
それを背後に迎えの船が来た。

安心にも似通った感覚を覚え、コンクリートの壁に両肘を立てる。

「……？」

誰かの呼ぶ声がして我に返る。
遠くには、いつの日か見たことがある夕陽が目に入る。

「コウ？　ちょっと返事しなさいよ！」
「ああ、神崎か？」
「アリアでいいわよ。ボーっとしてたわよ」
「いや、わりい。ちょっと考え事しててな」
「そう」

今いるのは防波堤の上、アリアはちょっと前にあるテトラポッドの上に腰かけている。
キンジは、というともっと下の方で猫の捕獲に尽力していた。
今回の依頼報酬はすべてキンジの物と決めていた、あくまで康介は付添い。
最終的な仕事はキンジが実行することになっていた。

「何を考えてたの？」
「昔の事だよ」

それ以上何も言わず遠くに沈む夕日に向きなおるアリア。
夕凪を受ける長い髪と夕日に映えるその姿は、とても絵になった。

「アリア、俺とキンジを奴隷にしたいってのは、相棒としてか？」
「……そうとも言うわね」
「だが、相棒を作るのには時間が要る。息を合わせる必要があるからな。
お前は時間が無いといった、奴隷ならば息を合わす必要はない。
だから、奴隷なれといったのか？」
「仕方がないじゃない！」

アリアが怒りを抑えた震える声で言う。

「だが、ホームズと一緒だったのは相棒だ、奴隷じゃない。
神崎・ホームズ・アリア、それは理解してくれ」
「あんた、何でそれを？」
「調べただけだ」
「速いわね」
「お褒めの言葉と受け取っておく。だが何故時間が無いと急ぐ？」
「それは……！」

話したくは無いらしい。

「詳しく話したくないのよ。でも、どうしても必要なのよ！
真実を探さなきゃならないのよ！！」

こっちを向いて怒ったように叫ぶ。

「言葉だけでも、思うだけでも、どうしようもない。
世の中、道理は通らない。正義や大義は、ただの綺麗事。
他人の力を我が物と考え、人を踏みにじる者がいる。
そういう奴は真実を隠す、金や欲に目が眩む」

それを無視して彼女だけに聞こえるよう呟く。

「あんた、何が言いたいの？」
「ある人の受け売りや。
やけどな、お前の求める真実にちょっと興味がわいた。
つまりや……」
「つまり？」
「手伝ってやるよ」
「ほんとに！？」
「ああ、キンジはどうするかは知らんけどな」

嬉しそうに微笑むアリア、さっきまでの剣幕はどこかに飛んで行った。
やはり、女の子はこういう表情がよく似合う。
その折、下に居た遠山が尻餅をついた、どうやら猫に引っかかれたらしい。
依頼も無事完了して、帰路につく。

ふと思う、この判断は何に基づいて決めたのだろうかと――――

居場所は火薬と硝煙の匂いの中に（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
ちなみに亡霊はＭ４Ｓｐｅｃｔｒｅの事です。
スペクトラはイタリア語で『亡霊』という意味なので、このように表記しました。

彼と彼女の思惑

依頼を終えた帰り道。
用事があると言って、遠山はどこかへ行った。
アリアと二人で寮へ帰ることになる。
黙ったまま歩いていると、先にアリアが口を開いた。

「あんた、ここに来る前は何をしていたの？」
「大阪の方で武偵をやってたんや、普通やろ」

真っ赤な嘘だった。
自分はそこで零中隊と呼ばれる特殊組織で動いていた。
それは今も変わらない、武偵の姿は仮の姿だ。

「ところで、背中の銃はサブマシンガン？」
「よう気づいたな。ご名答や」

時折コイツの洞察力には感心させられる。
背中の短機関銃は外からシルエットが分からないよう、うまく隠していたのだ。
やはり、只者ではないのだろう。

「見たことない形なんだけど……ミニ・ウージー？」
「いや、イタリア製のＭ４Ｓｕｐｅｃｔｒｅ（スペクトラ）や」
「あんた、本当にＢランクなの？」
「もちろんやで」
「信じられない気がするんだけど」

本当に鋭いと思う。

あまり、相手に話させるとボロが出る可能性もある。

「それより、遠山はどうするんや？」

「そうよ、あのバカよ！　あいつは何で奴隷にならないのかしら！？」

「色仕掛けでもしたらどうや？」

思い切り張り倒された。

「すみませんでした」

「わかれば良いのよ、あんなケダモノに色仕掛けなんてできないわ！！」

「まあ、あいつはマニアックな奴じゃ無さそうやしな。アリアの色仕掛けで成功するかどうかは……」

ドス！　ガス！！　バチーン！！！

メリメリメリ　＜コンクリの壁にめり込む音＞！！！

「まじで、ごめんなさい」

「あんた、次言ったら、風穴開けるわよ！！」

「はい……」

ボロボロになった体を引きずって部屋にたどり着く。

疲れたので、そのままベッドにダイブする。

すぐに浅い眠りに落ちた。

やがてリビングの方が騒がしくなり目が覚める。

「一度だけだ」

それは遠山が降伏する瞬間だった

「一度だけ？」

「ああ、一度だけだ。強襲科に戻ってやるよ。ただし組むのは一度だけだ。戻ってから起きた事件を一件だけ一緒に組んでやる」

「……」

「だから転科じゃない。自由履修として強襲科の授業に行く。それでいいだろ？」

二人が睨み合う。

わずかな沈黙の後、アリアが先に動いた。

「いいわ。その一件で、あんたの実力を見極めることにする」

「そうしてくれ」

アリアはソファから立つと荷物をまとめ始める。

「……どんな小さな事件でも一件だぞ」

念を押すように遠山が言う。

「そのかわり、どんな大きな事件でも一件よ」

それを言いくるめてしまうアリア。

中々達者だ。

「手抜きなんて、しないでよ」

玄関で振り向きざまにアリアが言う。

「ああ、全力でやってやるよ」

遠山が真面目な顔で答えた。

「なんやかんや言うて承諾したな」
「組むのは一度だけだ、それでアイツも諦めるだろう」

あくまでも、アリアとは組みたくないらしい。

「なあ、あの子が真剣に頼んでる。
そういう事を分かって言うてんのか？」
「……」
「いくら、なんでも可愛そうやろ」

難色を示す顔を見て不思議に思う、何か隠している事でもあるのだろうか？

「秘密にしている事があんのか？」
「人に話さないでくれると約束できるか？」
「当たり前や」

胸を張って答える。
言いにくそうにしていたが、ゆっくりと遠山が口を開いた。

「――――ということだ」
「はぁ、そらまた難儀な」

話を聞いて、開いた口が塞がらなくなる。
ヒステリア・モード

それが彼の持つ特殊な力らしい。
女性に対して性的な興奮を覚えることで発動する。

「せめて怒りや正義感が発動条件なら、よかったのになぁ」
「本当にそう思う。それに武偵自体、俺は嫌なんだよ……！」
「なして？」
「それは……」

更にも増して神妙な顔つきになる遠山に、これ以上知らない方がいいと本能が告げた。

「言いたくないんならそれでええ。
深入りして済まなかった」
「いや、別に構わない。だが、そういう事なんだ」

遠山が落ち込んだように言う。

「もう、寝るわ。おやすみな」
「ああ、おやすみ」

ベッドに戻って、今度は深い眠りにつく。
次の日、久しぶりに見た悪夢に起こされるのだった。

彼と彼女の思惑（後書き）

ふと全話を読み直してみたのですが……
酷い出来でした、申し訳ないです。

自分事ですが今日新たに資料本を買いました。
「こんなにスゴイ　地上最強の特殊部隊」
何を読んでいるのでしょうか、自分は。

自分の立場

私服の上に黒く丈の長いトレンチコートを着て、時計を見る康介とライカ。
時刻は午前十時ごろ、建物と建物の間を器用に登っていく。
三階ほどまで上がったところで、側面にある窓を開ける。
音を立てずに内部に侵入する、続いてライカも中に入る。
コートの裏側から銃を取り出す。
康介はＭ４ＳｐｅｃｔｒｅをライカはＰＰ－２０００を取り出した。
指を五本立てて一本ずつ折りたたむ。
最後の指が折れたとき、扉を開けて制圧作戦が開始される。

「ライカ、左回りで進んで。昇降口で落ち合おう」
「了解です」

背中を向けて別方向に移動する二人。
近くにあるドアを一つ開けて、中に飛び込む。
姿を確認される前に、銃の引き金を落とす。
中に居た四人の男は何が起きたのか分からないうちに倒れた。
銃声に気づいて駆け付けた男が、入り口で銃を構える。
横に飛んでかわす。
机の陰に一瞬隠れた後、机越しに射撃する。
薄い木の板を破って弾丸は男に着弾した。
男が倒れる音を聞いてから入口に移動する。
特殊反射鏡を使って外の廊下に誰もいないか確かめる。
一人、こちらに銃を向けている。
一歩また一歩と近づいてくる男。
銃を握り直そうとした瞬間に銃だけを突き出して撃つ。

頭と肩に当たり男は倒れる。

「ちょっと、手練れがおるな」

呟きつつ、インカムでライカに通信を送る。

「ヴェスパ7、進行状況は？」

「現在C－R－4で交戦中。……制圧完了」

「昇降口にて合流しよう。次はD－Rを制圧する」

「了解」

その数十分後、建物の制圧は完了した。

一階の裏口からひっそりと外に出て、黒のコートを脱ぐ。

丸めて鞄に入れて、手に持っていた銃も入れる。

「とりあえず、連絡ポイントまで行こう」

「うりゅ、そうしましょう」

先程までの銃撃戦が、まるで何事でもないように何処かに移動する二人。

そう、彼等はそういう側の人間なのだ。

「制圧完了しました」

「そうか、初の近畿外での作戦だったが上々だ。

おっとそうだ、ヴェスパ2が現在そちらに向かっている。

目的は心神の受け取りだ。気が向いたら連絡してやれ」

「……気が向いたら連絡します」

そう返答して通信を切る。

伸びをして顔を上げた。

ここは、男子寮の自分の部屋。

「ヴェスパ2さんはどんな人なのですか？」

机を挟んで向かいのソファに座っていたライカが聞いてきた。

先程の通信は、中尉と康介、ライカの三人の間で行われていた。

「ちょっと、変わった人やねん……うん、ちょっとな……」

最後の方は自信が無くなってきて声がしぼむ。

「うりゅぅ、私の先輩さんなんですよね？　会ってみたいです～」

「会わない方が見のためやと思うで……」

彼女――ヴェスパ2は戦闘よりも操縦士としての腕が高い。

第一次世界大戦の複葉機から現在の第五世代戦闘機まで乗りこなす。

彼女に乗りこなせない物は無いと言われるほどだ。

だが、人格はと言うと……

いろんな意味でぶっ飛んでる、表す言葉が無いほどだ。

やりたい事は何でも実行する人間だ。

ヴェスパの隊員が寝ている間に、髪の色を絵の具で全部ピンクにするとか。

年下の隊員を人形にしたりするのはまだ良い方で。

酷い時には中尉や少尉にまで、ちょっかいを出すときもあるらしい。

「うりゃ？　ルチアさんは面白い人だと言っていましたよ」

「そりゃアイツだけや」

そう言いつつ、壁の時計を見る。
時刻は十二時四三分、そろそろ午後の授業が始まるころだ。
一応今日は休むと申請していたが、中尉からの指摘で午後は出席するようにと言われている。

「学校へ行くか」
「うりゅ、そうしましょう」

遅れながらも登校し、午後の授業を受けた。
そして、その日の放課後の事。
強襲科に自由履修に来ている遠山は、やたらと人に絡まれていた。

「おうキンジィ！　お前は絶対戻ってくると信じていたぞ！」
「いいぞお！　楽しませてくれ！」
「お前の居場所はここしかないよー！！」
「ようキンジ！　お前みたいな間抜けでも相手してやるよ！」

そういう奴らを追い払って、強襲科を後にする遠山。
この後ゲームセンターに行くらしい。
行ったことの無い場所なので一緒に行く約束をしている。
肩を並べて歩いていると、門のところに特徴的なツインテールが立っていた。
言うまでもなくアリアだった。

「あんた、人気者なんだね」
「嬉しかねえよ」
「あたしなんか、ここでは誰も近寄ってこないの。
実力差がありすぎて、誰も合わせられないのよ」
「なるほど、文字通り『アリア』ってことか」

アリア、の部分を強調する遠山。
アリアが感心したように呟く。

「そうよ、『アリア』はオペラの『独奏曲』って意味でもあるのよ」

「ほんじゃあ、俺ら三人で『トリオ』ってとこか？」

思いついた小言を挟んでみると、以外にもアリアには好感触だったらしい。

「面白いこというのね、アンタ」
「そら、関西人やからな」

二人で笑っていると、遠山は一人スタスタと歩いていく。

「ちょっと、どこ行くのよ？」
「ゲーセンだよ、ゲーセン」
「げえせん？」
「ゲームセンターの略だよ。そんなことも知らんのか？」
「帰国子女だから、仕方ないでしょ」

ちなみに俺も知りません。
何せ市街地で活動するときにそういった店に出入りしたことが無いからだ。
やっぱり一般の人とは違うよな。
そんな事を考えていると、二人は自分を置いて口論しながら走っていた。

「え、ちょ、置いてかんといてくれ！！」

全力で二人の後を追いかける。
目的地に着いた時には三人とも息を切らしていた。

「なんで、こんな、疲れな、あかんねん」

肩で息をしながら悪態をつく。

「はあ、はあ、それは俺のセリフだよっ」

隣でダラリと両腕を垂れている遠山が息も絶え絶えに言う。

「キンジが逃げるからよっ！！」

なぜか一人元気なアリアが遠山の首を絞める。

「ギブ、ギブ！　今やられたら死ぬ！　まじ死ぬ！！　すぐ死ぬ！！！」

口から泡を吹き始めたところで遠山は解放された。
店に入り、遠山がコインを交換してくるのを待つ。
アリアは一台の箱みたいな機械に興味津々のようだ。

「これ、何？」
「俺も知らん」
「はあ、コウは日本人なんでしょ？」
「まあ、俺にもいろいろあるんだよ」

何かを察してくれたのかアリアはそれ以上何も言わなかった。
また機械に向きなおる。
どうやらその中のぬいぐるみに興味があるみたいだ。

あれ？
次第に口が逆三角になっていく、よだれも垂らしかけている。
「それに興味があんのか？」
「……」
「もしもーし？」
「……」
遠山がどれだけ話しかけても反応しない。
「……かわいー……」
呟いたその言葉に、俺と遠山は笑ってしまった。
「やってみるか？」
と、遠山がコインをアリアに渡す。
「やり方が分からない……」
「教えてやるよ」
「本当！」
首をコクコクと上下させて頷くアリア。
「コウは何かしないのか？」
「ああ、俺？　あ～、じゃあ、あれがしたい」
適当にあった機械を指さす。それは射撃ゲームだった。
「したい、ってやり方知らないのか？」

「ゲームセンターには来たこと無くてな、まあ教えてくれや」
「ああ、わかった」

それから、遠山に簡単な説明を聞いた。
要するに画面に出てくる敵に向けて引金を引けば良いらしい。
遠山から貰ったコインを入れてスタートする。
次々に出てくる敵に向けて引金を引いていく。

「結構おもろいな」
「ありふれたものだと思うが」
「珍しいねん。ってあれ？」

画面にＲＥＬＯＡＤと赤い文字が浮かび上がる、弾切れらしい。
手に持つ銃を確認するが、何処にもマガジンリリースが無い。
弾倉を交換しない銃なのだろうか

「……」

諦めて自分の愛銃、Ｐ２１０をホルスターから取り出して撃鉄を起こす。
狙いを定めて……

「あほかあああ！！」

スパーン！！　と思い切り頭をはたかれた。

「遠山、何で止めんねん？」
「実銃向ける奴がどこにいる！？」
「弾が切れてん、仕方ない」
「画面の外に銃を向けたらいいんだよ！！」

どうやら、康介は一般常識に欠けているらしい。
驚きの一面を見せた康介に遠山も驚きを通り越して、呆れている。

「お前、今度からゲーセン行くときは俺に声をかけろ。危険すぎる」
「おう、そうするわ」

ハハハと豪快に笑いながら、後ろを振り向く。
アリアの方も面白い事いことになっていた。
貰ったコインの殆どをつぎ込んだにもかかわらず、景品が取れていない。
あ、コインが尽きた、どうするんだろう？
二人で見ていると、アリアは何処かでお金をコインに換金してきた。
あいつ、初めて来たんじゃなかったけ？
彼女の並々ならぬ情熱は計り知れないようだ。

「あいつ、諦めるっちゅうことは無いらしいぞ」
「みたいだな」
「絶対お前を奴隷にするまで離さんと思うで」
「……」

容易に想定できたのだろうか、遠山が少し青ざめる。

「そういや、お前は何でアイツと組んだんだ？」
「ん～、雑多な理由はあるけど……まあSランクの武偵と組んで損は無いやろし……
まあ、あの子の顔が真剣やったて言う理由もあるかな」
「なるほど」

とか話しているとアリアが二回目の換金へ赴いた。
さすがに見かねたのか遠山が割って入る。
持ち前のプライドの高さから、離れようとしなかったアリアを遠山が押しのける。
一度ケースの中を見渡した後、どうやらターゲットを決めたらしい。
二つのボタンを順に押す。

ピロリロリ～、という効果音と共にアームが上がっていく。
二匹のぬいぐるみの胴体をがっつり捕まえて持ち上げる。
うまい具合にタグと尻尾が絡んで三匹目がズルズルとついてくる。
そして、そのまま景品口から三匹の白いネコみたいなライオンみたいな顔が出てくる。

「お前天才やろ？」
「いや、偶然だよ」
「凄いじゃない、流石あたしの奴隷ね」
「奴隷になった気は無いんだが」

何故だろうか、他人が簡単に取ったのを見ると自分もできる気がする。
隣の換金機で千円札を崩し、台の前に立つ。

「おい豊和、壊すなよ」
「安心しろって」

そう呟いてボタンを押していく。
アームが移動して、スルスルと降りていく。

「……」

景品にかすりもしないで、戻ってくるアーム。

「い、今のは練習や」

泥沼にはまる人の考えだったが、今の康介は考える由もなかった。

「……」

結局五回も台と換金機を往復することになった。
それでも、景品を得ることのできなかった。

朝焼けに映る敵の陰

いつもの時間、五時きっかりに目が覚める。
下の段で眠っている遠山を起こさないよう、静かにリビングまで移動する。
連絡用の端末を起動させ、電源が付くのを待つ。
起動が終わると、昨日分の報告書を作成していく。
毎日の報告書はその日の夜か、次の日の午前に提出することになっている。
数日分を纏める事も可能だが、毎朝作成するのが癖になっていた。
前日の作戦における、消費弾薬や所要時間、その他様々なことを記していく。
そのついでに、ある一文を追加しておく。
ゲームセンターとなる所を、遠山、アリア、と共に視察。

「ふい～」

文章を打ち終わったところで一息ついた。
二段階に分けて文書データを暗号化していく。
そして、出来上がった報告書を送信する。
時間にして二十分程度、まだまだ時間はあった。
愛銃の亡霊（スペクトラ）を取り出して、各種動作を確認する。
コレを握っている時は、何故か一番冷静になれる。

「そういや、ライカが羨ましがっとたなぁ」

ヴェスパの仲間内で通っている愛称がある。
自分の愛称は『亡霊』、愛銃と銃を握っている時の様子から付けられたものだ。

戦っている最中は笑いもせず抑揚の無い声になる。
そして自分の愛銃はＭ４Ｓｐｅｃｔｒｅ、イタリア語で『亡霊』。
ほぼ自動的に自分の愛称は決まってしまった。

「ケンカ売られてるようにしか思えんねんけどな～」

どうやら昨日、ルチアがライカに愛称の事を教えたらしい。
そして何故か、ライカはその愛称が羨ましいそうだ。

「ゆうてえ、あいつの使ってる武器から考えたらぁ……」

暇つぶしにライカの愛称を考える。
それもすぐに飽きたので、紅茶を入れることにする。
砂糖とミルクは多めだ。
加えて言うと、珈琲は今だ飲めない、あの苦さに耐えられないのだ。
それに珈琲は身長の促進を止めると言われている。

「アリアはコーヒーの飲みすぎで、ちっこいんかな？」

ふと頭に小学生程度の身長のアリアが出てくる。
あれ？　そういや、ライカも小さかったような……
二人が出会ったら比べてみても良いかもしれない。
アリアに殴られるのが容易に想像できた……

「あ、時間か」

六時二十分、指令文書や情報文書などが届く。
中尉からの指令、もっとも最近は手紙のやり取りみたいになっている時もあるが。

「ヴェスパ３へ
東京に着いてからの経過は順調と見れる。
なお、独断で『神崎・Ｈ・アリア』とパーティーを組むことにした件。
それは、武偵行動の一環と認識する。
特別何かを考える必要はない。
以上――」

まあ、勝手にアリアと組んだ件については不問という事なのだろう。
特に目新しいものは無かった。
続いてはライカ――ヴェスパ７の情報文書だった。

「電子戦処理班より
氏名　ライカ　＜本名は不明、所持物に記載されていた＞
生年月日　不明
身長１４５　体重３７　３サイズ　－　６９／５１／７２
補足情報
血液鑑定よりロシア人と東洋系の人間との混血と判定
言語や動作、戦闘経験以外の記憶は欠落。
肉体は改造された後がを発見、処置施設は不明。
使用武器　ＡＫ７４突撃銃、ＰＰ－２０００　短機関銃、
ＳＶＤＳ狙撃銃、スチェッキン自動拳銃。
Ｖ－９４対物狙撃銃
――――――」

見ていて不審に思う、不明な情報が多すぎる。

（何もんやねん――）

いつも彼女にはこの疑問を抱く。
だが、天田中尉はヴェスパに着任させた。
どこの施設で肉体強化されたか分かりもしないのに――
わずか数名の戦闘員にもかかわらず、部隊として成り立つ理由。
それは、ヴェスパの隊員は薬物と電気刺激、人工筋肉や機械化。
複数の強化を肉体に行っている。
その強化手術が常人では成し得ない行動を可能にした。
それ故に『中隊』の名を冠している。

「まあ、悪い奴では無さそうやねんけど……」

端末を閉じて紅茶を啜る、安物だが十分心を和らげてくれる。

「おはよう、早いな」

眠たそうに寝室を出てきた遠山が立っていた。

「まあ、朝は早い方やからな」

朝の挨拶を交わした後、朝食をとることにする。
遠山はコンビニ弁当の残り。
対する俺は、コッペパン・干し肉・干し野菜・塩・砂糖・水。
あまり変わらない朝の献立だ。
腹六分目が何時でも戦える、それが康介の食事だった。

「……」
「どないした？」
「いや、何でもない……」

何故か俺の朝食を見て驚く遠山、美味しそうだったのだろうか？
などと、的外れな思考をする康介が先に朝食を終える。

「朝はいつもそんな感じなのか？」
「まあ、大体同じやな」

やはり美味しそうなのか？

「それより今何時？」
「七時半前だ」

腕時計を見たキンジが告げる。
まだまだ余裕だ、いつもよりのんびりと登校準備を済ます。
余った時間を読書に回す。
そろそろだろうという頃に、遠山も登校準備を終える。

「行こか？」
「ああ、行こう」

玄関で靴を履いて扉を開ける。

「アリアが居らんとちょい寂しいな？」

いつもより静かな雰囲気につい言葉が出た。

「はあ？　あいつが居ると朝から００７の真似をする羽目になるぞ」
「なんやそれ？」

自分が居なかった日の朝について説明を受ける。

中々笑える内容だった。
他愛ない雑談をしながら、寮の門が見える所まで来た時だった。
一台のバスが停車するのが目に映った。

「遠山、五十八分より前のは何分発や？」
「四十五分」
「そいつは絶対過ぎとるよな？」
「たぶん」
「……」
「「ダッシュ！！」」

同時に出た掛け声とともに駆け出す二人。
滑るように門をくぐってバス停に着く。
しかし、その時すでにバスは武偵校へ向けて発進していた。
シャツのネクタイを緩めながら落胆する。

「チャリで行くか？」
「生憎、始業式に星となった」

そいや遠山はチャリジャックに遭ってたっけ？
初日から運の無い奴だな。

「お前のチャリに乗せてくれ」
「そういや、持ってくんの忘れてたわ」

一限目の遅刻が確定した瞬間だった。
その折、遠山の携帯が鳴る。

「もしもし？」
「キンジ今どこ？　コウはどこに居るの？」

電話の主はアリアだった。

「俺も、豊和も寮の門にいる」

「ちょうどいいわ、C装備に武装して女子寮の屋上に来て！」

「強襲科の授業は五限目だろ？」

遠山が不思議そうに尋ねると、アリアが声を荒げた。

「授業じゃない、事件よ！　あたしがすぐと言ったらすぐ！！」

何が起きたんだ？

朝焼けに映る敵の陰（後書き）

こんな作品にも目を当ててくれている人がいるととても嬉しいです。
本当にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3480z/

緋弾のアリア× 特務零中隊

2011年12月17日07時58分発行